

ある。裏は、「九ミ八十一井」の呪句を字体や位置を変えて書いてある。四本を紐で縛ったと思われる痕跡がみられることから、四枚一組で使用された可能性がある。

(5)は「大般若経」の転読札である。武運長久の祈願札の出土は珍しい。天文一五年(一五四六)という年は、管領細川晴元が丹波国に走り、翌一六年丹波国より入京をはかる動乱の年で、細川氏と丹波の土豪波多野氏との勢力争いの中、初田館もまたその渦中にあつた。

なお、木簡写真は森昭氏の撮影による。

(岡崎正雄)



(5)

## 兵庫・福田片岡遺跡

- 1 所在地 兵庫県竜野市誉田町福田
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)四月～十一月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 岡崎正雄・別府洋二・平田博幸
- 5 遺跡の種類 集落跡・館跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代、古墳時代、平安時代後期～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

福田片岡遺跡は、竜野市街地より南東へ約3kmの揖保郡太子町との境界近く、揖保川支流、林田川左岸の自然堤防上を中心に広がる。



(竜野)

建設省太子・竜野バイパス建設事業に伴い、一九八一年より本格的に発掘調査が行われた。当該地は、播磨国法隆寺領鶴荘域内にあり、嘉暦四年(一三三九)の絵図を用いて復原すると、西方条の九条「石丸屋敷」「下村田」、十条「流田」

「満願寺」、十一条「片岡庄」「佐会田」に相当する。木簡は一点出土したが、その地点は、絵図で十条・十一条間に「筑紫大道」と朱書された南にある「片岡庄」の堀に相当すると思われる幅四・五m、深さ約二・四mの溝の底で、一五世紀後半から一六世紀前半の備前焼・土師器・染付・瓦・橋材等が相伴している。絵図にみえる「筑紫大道」の北、十条に相当する地点には同時期の幅三・五〇七m、深さ二・二・四mの堀で囲まれた館跡がある。また、底に墨書された青白磁が出土した。なお、他に、鎌倉時代の井戸から木簡がもう一点出土したが、遺存状態が悪く釈読できない。

# 8 木簡の积文・内容

## (1) ・＜弥次郎＞

・＜米

(86)×20×5 032

付札で遺存状態が悪く、切り込みの部分で折れているが、ほぼ完形となる。

# 9 関係文献

兵庫県教育委員会『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和五九年度』(一九八七年)

(岡崎正雄)

## 愛知・清洲城下町遺跡(1)

所在地 愛知県西春日井郡清洲町

調査期間 一九八六年(昭61)四月～一九八七年三月

発掘機関 財団法人埋蔵文化財センター

調査担当者 小澤一弘・細野正俊・水谷朋和・中野良法・梅本博志

遺跡の種類 城郭・都市跡

遺跡の年代 平安時代～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(名古屋北部)

清洲は、織田信長の居城地として知られているが、中世においても、尾張の守護所が置かれたこの地方の中心都市であり、また、信長以後も、豊臣、徳川政権下の有力大名が次々と入城し、慶長一五年(一六二〇)の名古屋築城に至るまでは全国屈指の城下町を形成していた。この清洲城とその城下町